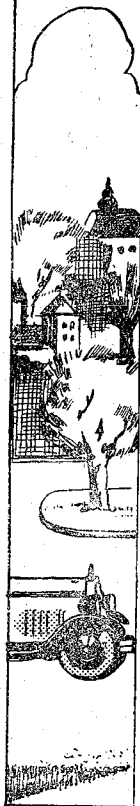


説苑



臺灣の大斷崖道路

長岡隆一郎

二十年ぶりで臺灣に來て全島道路の改良ぶりに感心致したが、之に就ては本誌昭和十一年三月號から昭和十二年三月號迄十回に涉つて詳しく紹介されて居るから、重復を避けて縦貫道路の改修工事の事などは省略し、主として東部大斷崖道路を旅行した印象を申上げる事とする。

此の道路は蘇澳から花蓮港に至る三十一里の斷崖を連絡する臨海道であつて、大正五年度から大正十三年に至る九個年を以て歩行道路としての開鑿を了へ、昭和二年度から

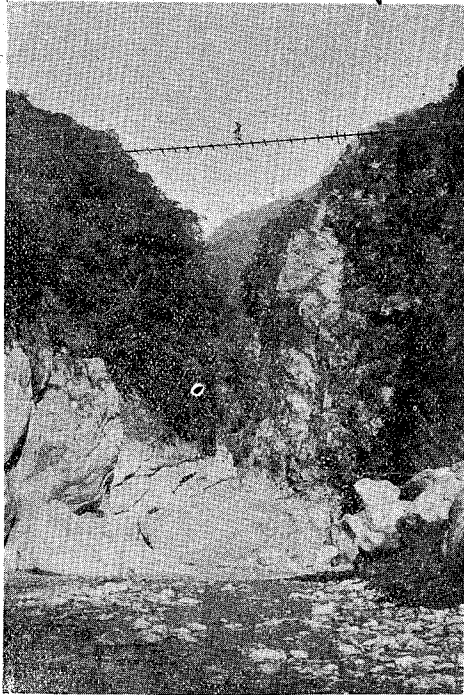
昭和六年度に至る五個年を費して自動車の通行を可能ならしむる道路に改修したもので、前後を通じ費したる總工費五百三萬三千圓、何しろ大斷崖の頂上から鐵の鎖につけた籠の中に工夫を乗せて施工させたやうな難工事であるので工事中に死者五十八人を出して居る。本道の改修成つて始めて中央山脈に依て陸路の交通を絶たれて居た東部と西部との兩地方が自動車に依つて連絡せらるゝに至つたものである。

私は渡臺前に色々友人からおどかされた。兎も角も甚だしい處は上三千尺、下三千尺（精確に云へば一千二十米突）の斷崖道路である。運轉手が一尺ハンドルを間違へれば太平洋の海中に落ちて屍體もあがらない。成る可く

暑い日は避けるがよい。

運轉手が涼しい海風に吹かれてウトウトすると事故を起す。又降雨の後はやめるがよい。上から岩石や土砂が落ちて來て不慮の災害に見舞はれる。とか何とか色々な脅し文句を聞かされたものであ

る。然し實際行つて見ると之はほんとの冗談の脅し文句であつて、そんな危険は少しも感じなかつた。寧ろ東洋第一の絶景だと云ふ印象が残つて居るばかりである。



私が蘇澳を立つたのは午前十時頃であつた。道路の幅員が狭く、自動車のすれ違ひが出来ないので、車は一定の時間に通行して出立しなければならぬ。途中、大濁流水で中

食をすませ、タロコの仙臺橋に着いたのは午後の二時頃であつた。其の雄大な景色は到底拙い筆では云ひ現はされない。但し正直に申せば此處や清水大斷崖で下を視くと少々恐ろしい。もつと正直に申せば眼がくらむやうな凄さである。それと同時によくも、こんな處に自動車道路を造りあげた

ものだとつくづく感服させられた。

タロコ峽から花蓮港に着いたのは夕方であつた。夜は昭和會館で長講一席の講演をやらされる。此の頃は寄席藝人

のやうに、夜になると高座に現はれる事になつて居る。

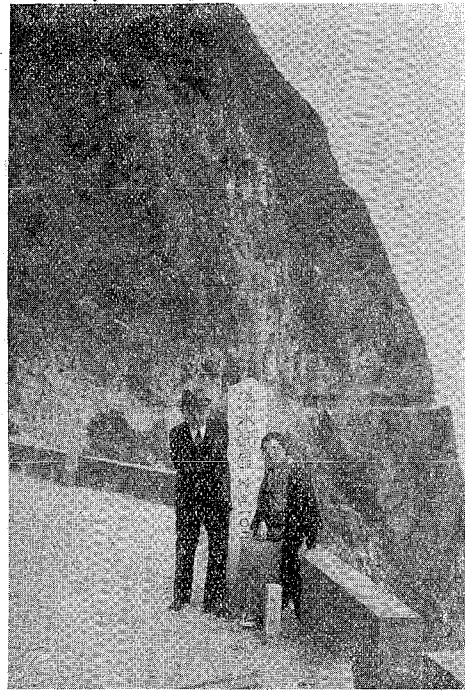
翌日、臺東で一席を辨じて知本に泊り、其の翌日知本から自動車で恒春に向つた

が、此の道路は實に荒廢を極めて居る。俗稱不知親と云ふ觀音鼻の海岸は風雅な駕籠に乗つて行かねばならぬ。大武では此の先きの橋が毀れて居るので、御一行の自動車が通れるやうに、唯今應急修理中でありますからと云ふので、二時間ばかり待たされた。然し當局者

の説明を聞くとも無理がないと思はれる點もある。それは今楓港から阿塼衛に至る東西連絡線の工事中で本年度内には竣工する豫定である。此の方に全力を注いで居るから大武

恒春間の路線の修理は怠り勝ちになつて居るとの事であつた。

序で乍ら東西連絡道路の事を申上げる。私の通過した大



武恒春間の道路は東西連絡道路としては稍々南方に偏するのみならず、左程經濟的路線とも認められず。又浸水營越を改修する事となると距離に於ては多少短縮せらるゝけれども經費莫大に上る爲め最少經費を以て最短距離を擇ぶ事となり、起點を楓港（高雄州潮州郡枋山庄）に置いて東に分岐し、中央山脈を横斷して阿塼衛（臺東廳大武より南約七浬）に出で呂家溪に至る路線を擇定するに至つたものである。此の工事費は約百七十萬圓。始は昭和八年度から五個年計

畫で着手したものであるけれども、經費の關係で一年延期し、今年度で竣工の豫定である。之で所謂臺灣島東西南北循環自動車道路の完成に數十歩の前進を爲す譯である。

此の道路の設計の内容は、どう云ふ理由からか知らぬが、部外秘扱になつて居るので、残念ながら、之を發表する事は出来ぬ。然し私は主任の技術者から詳しい説明を承つた。勾配やカーブや橋梁の動荷重の計算などに、多少無理があるやうにも見えるけれども、之は現地の地勢や、狀況等を考へれば實は適切な設計のやうに思はれる。内地の道路構造令のやうな頭で臺灣の道路の設計を批評する事が、仰も大きな間違である。私は臺灣の港灣の工事に就ては（特に高雄築港の設計及工事に就ては）多少の不満



を持って居る。港灣修築の如き百年の大計に關する事は、當時在任の技術者の獨斷的設計に依て施工するよりは、宜しくシツピングに關係あるエキスパート等を網羅せる港灣調査會の如きものを設けて工事着手前に設計案を練る必要がある事を確信する。臺灣には都市計畫委員會なるものは既に設けられて居る。然し之れ以上に必要なものは港灣調査會である。話は聊か脱線した形であるけれども、私は港灣に就て失望した事を道路に於て取り返した。道路に關する施設に就ては實に感服の外はない。（恒春驚巒鼻間の木麻黄並木の街道の如き快適なるドライブウエーは内地でも恐らくは餘り澤山はあるまい。）

尤も臺灣路政の發達に就ては内地の夫れに比して幾多の

便宜なる條件がある。第一が用地の寄附（若は徴收）である。第二が簡易なる土工は地元民の奉仕（若は強制勞働）

に依る事である。之は獨逸のアルバイト・ディーンストより、もつと徹底して行はれて居る。其の事の是非善惡を批評する意思是毛頭ない。然し地方を廻つて見ると、地元民の奉仕に依て施行する道路工事を監督する者は土木の技術者には非ずして、郡守の配下に屬する警務課長指揮の下に、警察官吏が其の任に當て居る。此の事の當否に就て批評する意思是決して無い。或は現下の臺灣に於ては適切であると申せるかも知れぬ。然し工事費が安くあがると云ふ原因の一つが此所にある事だけは確である。

實際、臺灣に於ける警察官の土木技術に關する知識に至つては驚くの外はない。殊に蕃界勤務の巡查は吊橋の設計を自分でやり、無智の蕃人を指揮して立派な橋を造り上げる。道路新設に就て切土盛土の計算なども實驗に基いて常識的に設計して、決して大なる遠算がない。學校出たての土木技手など到底叶はない位、熟練して居る。（其の上、彼

等の中にはオルガンを彈じて蕃童に唱歌を教へて居る者さへある。）

私は蕃界勤務の警察官諸君、小學校教員諸君には、内地に在住する同胞の一人として、其の御辛勞に對して心からの慰問の言葉を述べて來た。言葉は頗る下手であつたが、そんなまどろかしい媒素を靈の火は待たない。内地から色々な方が見えますが先生のやうに我々に優しい言葉をかけて下された方は始めてですと、鬼を敷くやうな警察官がホロホロと涙を流して居た。（於臺灣）

×
—————
×

×
—————
×